福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1366 集

中村町遺跡 7

中村町遺跡第 8 次調査報告

２０１９

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が多く残されており、これを後世に伝え残していくことは現代に生きる我々の重要な務めであります。福岡市教育委員会では近年の都市部における開発事業の増加に伴い、止むを得ず失われていく埋蔵文化財の発掘調査を実施し、失われていく遺跡の記録保存に努めているところであります。本書は、中村町遺跡第８次調査の成果を報告するものであります。本調査では縄文時代から古代にかけて中村町遺跡内を流れていた旧河川とその水辺で行われていた祭祀遺構を発見し、多くの貴重な成果をあげることができました。本書が、市民の皆様の文化財に対する理解を深めていく上で活用されると共に、学術研究の分野でも貢献できれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで賜りました多くの方々のご協力とご理解に対し、心からの謝意を表します。

平成 30 年 3 月 25 日

福岡市教育委員会
教育長　　星子　明夫

例　言

1．本書は、福岡市南区野間 3 丁目 162 番 1，162 番 2 地内おける福祉施設建設工事に先立って、福岡市区教育委員会が平成 29 年度（2017 年度）に実施した中村町遺跡第８次調査の発掘調査報告書である。
2．本書の執筆・編集には本田浩二郎があたった。
3．本書に使用した遺構実測図は本田が作成し、本田が製図した。
4．本書の遺構実測図中に用いている方位は、すべて磁北であり、真北より 6°21′西偏している。
5．本書に使用した遺物実測図は本田・元田晃子が作成し、本田が製図した。
6．遺物実測図の縮尺は土器類を 1/4 に、石器等は 1/1・1/4 の縮尺に統一した。
7．本書で使用した遺構写真は本田が撮影した。
8．本調査に関わる記録・遺物類は報告終了後、福岡市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・管理・公開される予定であるので、活用されたい。

本文目次

第一章　はじめに
（一）調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
（二）調査の組織・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
遺跡の立地と環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
第二章　発掘調査の記録 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
（一）調査の概要　　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
（二）基本層序　　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
（三）遺構と遺物　　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
第三章　まとめ　　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16

第一章　はじめに

（一）調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、同市南区野間三丁目 162 番 1，162 番 2 における老人ホーム建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会（28- 2 -870）を平成 29 年 1 月 10 日付で受理した。

申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である中村町遺跡に含まれていること、過去の確認調査（23-2-910試掘調査報告書）により対象地内南側では現地表面下105cmで遺構が確認されていること等から、遺構の保全等に関して申請者と協議を行った。過去の確認調査は敷地南側で実施していたが、今回予定されている建物計画が敷地全体に及ぶことから、遺構の有無を判断できなかった範囲について改めて確認調査を実施した。その結果、217.80㎡の敷地全体に対して南西側 80㎡について遺物包含層が確認され、弥生時代から古墳時代にかけての大量の土器が出土した。建物基礎工事による埋蔵文化財への影響が回避できないことから、遺物包含層が確認された範囲については記録保存を目的とした発掘調査を実施することで申請者と協議を行い合意した。

その後、平成 29 年 9 月 15 日付で建築事業者である株式会社グリーンケアを委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同年 9 月 25 日から発掘調査を着手し同年 10 月 11 日に調査を終了した。資料整理および報告書作成は平成 30 年度に実施した。

（二）調査の組織

調査委託：株式会社グリーンケア　代表取締役　柴口由喜子
調査主体：福岡市教育委員会
（発掘調査：平成 29 年度・資料整理：平成 30 年度）

調査総括：	文化財部埋蔵文化財課	課長	常松幹雄（29 年度）
	文化財活用部埋蔵文化財課	課長	大庭康時（30 年度）
庶　　務：	文化財活用部文化財活用課	管理係長	藤克己
		管理調整係	松原加奈枝
事前審査：	埋蔵文化財課事前審査係		清金良太（29 年度）
			山本晃平（30 年度）
	同課事前審査係主任文化財主事		池田祐司（29 年度）
			田上勇一郎（30 年度）
調査担当：	埋蔵文化財課事前審査係長		本田浩二郎

なお文化財部は、平成 30 年 4 月 1 日付で文化財活用部へと組織名の変更が行われた。

遺跡調査番号	1721	遺跡略号	NMM8
調査地地番	南区野間3丁目162番1、162番2	分布地図番号	51　高宮
開発面積	317.48㎡のうち217.80㎡	調査面積	77.22㎡
調査期間	2017.09.25～2017.10.11	調査原因	老人福祉施設

遺跡の立地と環境

中村町遺跡（遺跡主番 0167）は、南区野間 3・4 丁目、若久 1 丁目にかけて所在する。地形的には脊振山地から北東方向へと派生する春日原台地北東端部付近の低丘陵上に位置する。春日原台地北東側は現在の西鉄大牟田線付近で直線的に端部が揃うが、これは付近に警固断層が北西～南東方向へ延びるためである。この春日原台地の北側先端は鴻臚館跡・福岡城が乗る丘陵まで続いている。遺跡は標高 8 ～ 20m の北東方向に延びる低丘陵先端部一帯に位置し、第三紀層を基盤層とする。この低丘陵は東側に若久川、西側には現在は埋没した小河川が流れ、これらの河川によって台地端部が解析され形成されたものである。遺跡は南北 650m ×東西 250m の範囲で登録されている。

これまで中村町遺跡では 8 次までの調査が実施されている（平成 31 年 2 月現在）。第 1 次調査（9044，Vol.373）は遺跡範囲中央部、標高 16m 前後の丘陵南側斜面に位置する。調査では古墳時代後期と古代の集落を検出している。第 2 次調査（9054，年報 11）は遺跡範囲を南北に分断する市道建設の際に行われ、丘陵西側を北流する旧河川の氾濫原を確認している。第 3 次調査（0473，Vol.891）は遺跡範囲北端部で行われた調査で、対象地の南西端部のみ遺構が残存していた。対象地のほとんどが過去の開発造成により大きく削平されていたが、弥生時代終末期～古墳時代初頭の集落が検出された。第 4 次調査（0908，Vol.1122）は遺跡範囲南端部で行われたもので、標高 20 ～ 22m の丘陵北側緩斜面で 8 世紀代の掘立柱建物・区画溝が検出されたほか、縄文時代晩期の埋甕（埋設土器）が複数調査された。第 5 次調査（1010，Vol.1159）は遺跡範囲の北東部に位置する。調査では上層で古代の遺構、下層で縄文時代前期後半から後期初頭の河川を検出している。上層遺構の多くは古代に属するが、埋土からは弥生時代の土器が多く出土しており近隣に弥生時代の集落が存在していた可能性が考えられる。古代の遺構は土坑・掘立柱建物 4 棟・溝であり、溝遺構は真北から東へ 10 ～ 12°東偏し、掘立柱建物は 8 世紀中頃～後半に位置づけられる。下層の縄文河川からは前期後半の轟 B 式・曽畑式が主として出土するが、中期前半の土器を若干含んでいる。第 5 次調査地点の南側に前期集落や貝塚が想定されている。第 6 次調査（1029，Vol.1160）は第 4 次調査に隣接する調査で、4 次調査同様に 8 世紀代の掘立柱建物が確認され、一帯に官衙的性格を伴った遺状構群が展開することが確認された。第 7 次調査（1706, 本年度報告）は 5 次調査の南側に位置し、弥生時代・古墳時代の集落と縄文時代の河川が確認されている。

このように中村町遺跡では縄文時代から古代にかけての遺構・遺物が確認されている。縄文時代の遺物はほぼ遺跡全体で確認されるが、集落本体の位置は未確認である。弥生～古墳時代の集落は、第 3 次調査で確認された以外は未検出であるが、丘陵端部際に存在していた可能性が考えられる。古代には丘陵東側の警固断層付近に、大宰府と鴻臚館を結ぶ古代官道の一つである「水城西門ルート」が整備された。中村町遺跡周辺の谷部は古くから那珂川流域と樋井川流域を結ぶ東西方向の交通路として利用されていた可能性が考えられており、中村町遺跡は「西門ルート」との分岐点に位置しており交通の要所であった可能性がある。遺跡内で確認されている古代遺構の性格を考えるうえで重要な点である。

中村町遺跡周辺の遺跡を概観してみると、同じ低丘陵上に若久A 遺跡・上若久遺跡が登録されているが、いずれも調査に至った事例はない。近隣で発掘調査が実施された事例としては野間 B 遺跡内で古代官道西門ルートを確認した 4 次調査と野間古墳群を調査した 1 ～ 3 次調査がある。埋蔵文化財包蔵地として古くから登録されている遺跡についても、開発が古い段階（昭和初期から戦後）ものについては調査に至る事例は少ない。

Fig.1 中村町遺跡周辺遺跡分布図（S=1/8,000）

第二章　発掘調査の記録

（一）調査の概要

中村町遺跡第 8 次調査地点は、遺跡範囲内の北側に位置する（Fig.2 参照）。調査着手前の現況は駐車場であり、現地表面の標高は 8.50m 前後を測る。対象地は中村町遺跡が展開する低丘陵の東側裾部付近に位置しており、東側には若久川が北流する。現在の若久川は河川改修により川岸が整備され、ほぼ直線となるが、昭和初期の地形図では大きく蛇行している様子が確認できる（Fig.15 参照）。

調査に先立つ試掘・確認調査では対象地南側に包含層が確認され、それ以外の範囲については土器などの遺物をわずかに包含する河川堆積層であることが報告されていた。予定された建物は敷地全域に及ぶもの、埋蔵文化財が工事により破壊される範囲約 80㎡についてアスファルトを撤去し重機による掘り下げを開始した。旧水田面床土直下で確認された遺構検出面までの掘り下げの結果、調査区の大半が旧河川の流路堆積層となり、旧河川流路西側に弥生土器・土師器を大量に包含する黒色粘質土層が確認された（Ph.1・2 参照）。この黒色粘質土は検出当初、流路際に堆積した帯状の遺物包含層と思われたが掘り下げの結果、不定形土坑（SK-01）と円形土坑（SK-02）が重複した遺構であることが確認されたため、遺物の検出と出土遺物の取り上げを行った。これらの遺構は旧河川西側岸に営まれた祭祀土坑と考えられ、土坑内からは大量の土器・石器が出土した。

これらの遺構に覆い被さるように堆積する河川堆積層内からも縄文時代～古墳時代の土器・石器が出土するため、旧河川堆積層を SD-01 として掘り下げを行った。祭祀土坑・旧河川堆積層ともに標高 7.30m 付近で水平に削平を受けている。調査区付近が過去の開墾により大きく切り下げられ耕作地として利用されていたことがわかる。昭和初期の地形図を確認すると、調査区を含む丘陵裾部一帯は耕作地として表現されており、これを埋めて宅地が進んだのは昭和 30 ～ 40 年代であることがわかる。調査面積は狭小であるものの、遺物は縄文土器片、弥生土器、土師器、須恵器、石庖丁や石鏃・石核等の石器がコンテナケース 33 箱分が出土した。

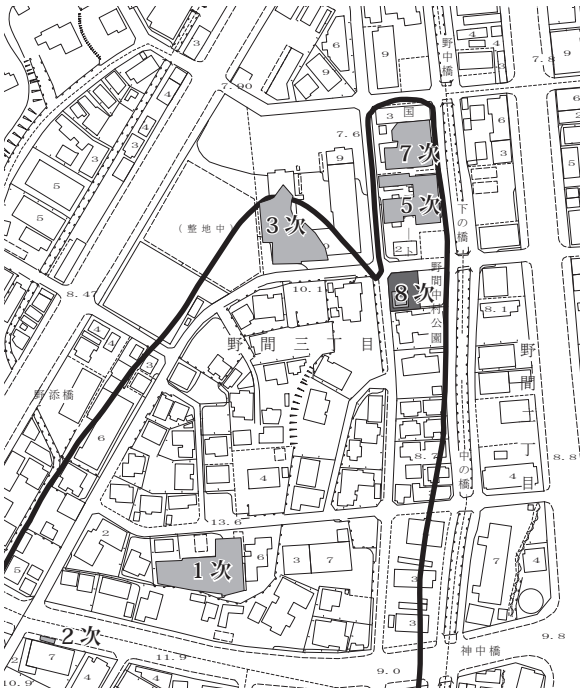


Fig.2 第 8 次調査地点位置図（S=1/4,000）
遺跡範囲の北半部に調査が集中している。

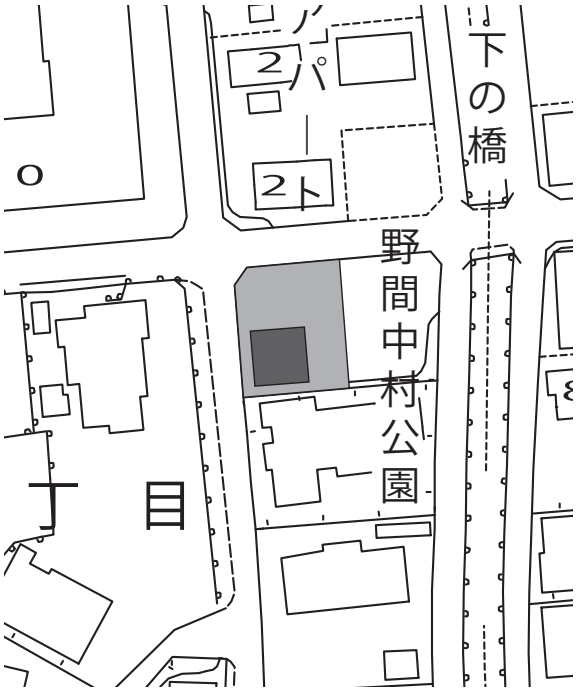


Fig.3 第 8 次調査地点位置図（S=1/2,000）
対象地は低丘陵東側裾部に位置している。

（二）基本層序（Fig.5、Ph.5・6）

第 8 次調査地点は、中村町遺跡東側の旧河川西側岸際に位置するため、旧耕作土・床土以下の堆積は基本的に河川堆積層となっていた。旧河川は調査範囲東側半分以上を占め、古墳時代初頭の祭祀土坑の上部も一部河川堆積により削平を受けていた。このような状況から旧河川は氾濫原内で流路を変化させながら北流していたことが分かる。土層断面でも確認できるように祭祀土坑が掘削された砂混じりの黄褐色粘質土の基盤層面は、床土により水平に削平されているが本来は緩やかに西側の丘陵上部へと傾斜していたものと考えられる。

自然流路（旧河川）SD-01 の堆積状況をみると、暗褐色・黒色粘質土と褐色粗砂・配色シルト砂が交互に堆積する。弥生土器や須恵器などが集中して出土する層位は鉄分沈着が認められる粗砂層で、粘質土・シルト砂を挟み数層に分かれる。流路の変化に伴い丘陵際に遺物包含層が形成されたものと考えられる。

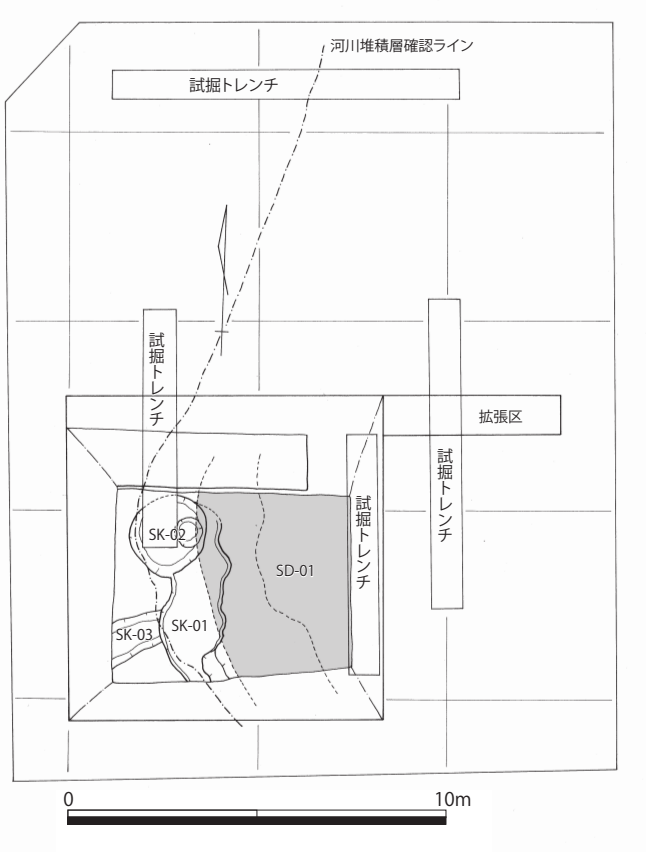
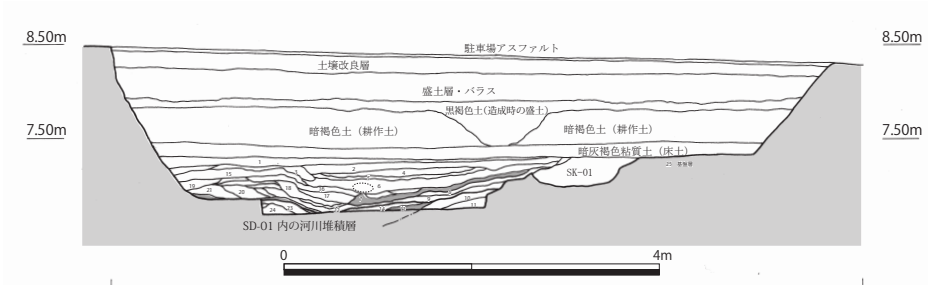


Fig.4　第 8 次調査地点位置図（S=1/200）



1. 褐色粗砂質土（鉄分沈着）
2. 褐色粗砂　3. 黒灰色砂質土
4. 褐色粗砂質土　5. 暗褐色粘質土
6. 灰色粗砂（遺物集中層）
7. 黒色粘質土　8. 灰褐色粗砂
9. 灰色シルト砂
10. 白色シルト砂
11. 灰褐色粗砂
12. 褐色粗砂
13. 黒色粘質土　14. 褐色粗砂
15. 灰色粗砂　16. 暗灰色シルト砂
17. 暗褐色粗砂質土
18. 灰色シルト砂
19. 暗褐色粗砂質土
20. 灰色シルト砂　21. 灰色粗砂
22. 暗灰色シルト砂
23. 暗灰褐色シルト砂
24. 灰白色シルト砂
25. 基盤層（黄褐色粘質土）

Fig.5 第 8 次調査地点　南側土層断面図（S=1/80）

Ph.1　表土掘削後の遺構検出（南西から）

Ph.2　遺構検出状況（北から）

（三）遺構と遺物

調査では建物予定範囲約 200㎡のうち、試掘調査により遺物の出土が確認された範囲約 80㎡について掘り下げを行ったため、検出できた遺構は祭祀土坑 2 基と自然流路 1 条と溝状遺構（SD-03）となる。なお、調査区東側には平成 15 年度に実施した試掘トレンチが位置している。標高 6.8m 以下では現在も激しい湧水が認められ、トレンチ内の埋め戻し土が崩落したため実際に調査を実施できた面積は 77.22㎡に留まる。以下に各調査区・各遺構面の概要と各遺構面で検出した遺構についての説明を行う。

SK-01（Fig.6）

調査区中央部西側で検出した不定形の土坑で、長軸 1.5m ×短軸 0.9m 前後を測る。遺構の北側は SK-02 と重複するため正確な形状と法量は不明である。検出面から土坑底面までは 15cm 程度を測るが、遺構上部は自然流路 SD-01 および過去の開墾により削平を受けているため判然としない。土坑の埋土は粗砂混じりの黒褐色粘質土で炭化物を多く含んでいた。土坑内には底面から 3cm 程度浮いた位置に大量の土器が供献された状態で検出された（Ph.7 ～ 10）。東側方向に接合可能な土器片が平面的に出土したことや、高坏・器台が土坑西側に偏って検出される等の出土状況から土坑西側、旧河川とは反対側となる丘陵方向から供献されたことが想定できる。土坑内からは弥生時代後期後半から古墳時代初頭～前期にかけての土師器・石製品等が出土した。

出土遺物を Fig.7・8 に示した。1 はミニチュア土器である。2・3 は土師器小型丸底壺、4 は甕である。5・6 は高坏である。7・8 は小型器台である。いずれも胎土は緻密で焼成は良好、外器面の調整は摩滅しているが丁寧な造りであることが分かる。9 ～ 21 は甕である。13 は肩部に横位の刷毛

Ph.3　SK-01・02 掘り下げ状況（北から）

Ph.4　遺構・河川堆積層の掘り下げ（南から）

Ph.5　8 次調査地点南側土層（北から）

Ph.6　SD-01 堆積状況（北から）

目調整を施し、内面はヘラ削りを基本とするが一部刷毛目調整が残る。器厚は厚めであるが胎土は精緻である。15 は外器面には原体がやや幅の広い刷毛目調整を施す。16 は体部上半に刷毛目調整後に波状沈線が加えられる。20 は肩が張らず胴部最大径付近まで滑らかに広がる。21 は肩部に強い屈曲を持ち、外器面は縦位の刷毛目調整を施す。23 は土師器甕の把手、24 ～ 26 は土師器壺の底部である。27・28 は土師器二重口縁壺である。いずれも口縁部を下にした逆位の状態で出土した。28 は大きく開く口縁部を持つ。29・32 はやや外反する口縁部を持つ直口壺である。32 は口唇部にナデ調整による平坦面を設け外器面を縦位の刷毛目、内器面を横位のナデで調整する。30・31 は砥石である。

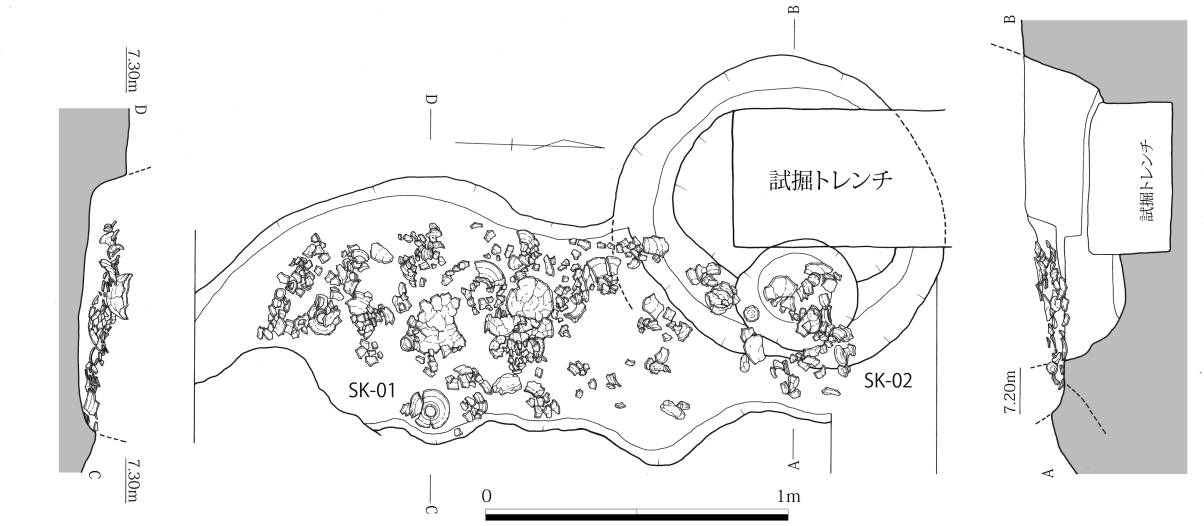


Fig.6 SK-01・SK-02 遺物出土状況実測図（S=1/25）

Ph.7　SK-01 遺物検出状況（北西から）

Ph.8　SK-01・02 遺物出土状況（南東から）

Ph.9　SK-01 遺物出土状況・部分（北西から）

Ph.10　SK-01 遺物出土状況・部分（西から）

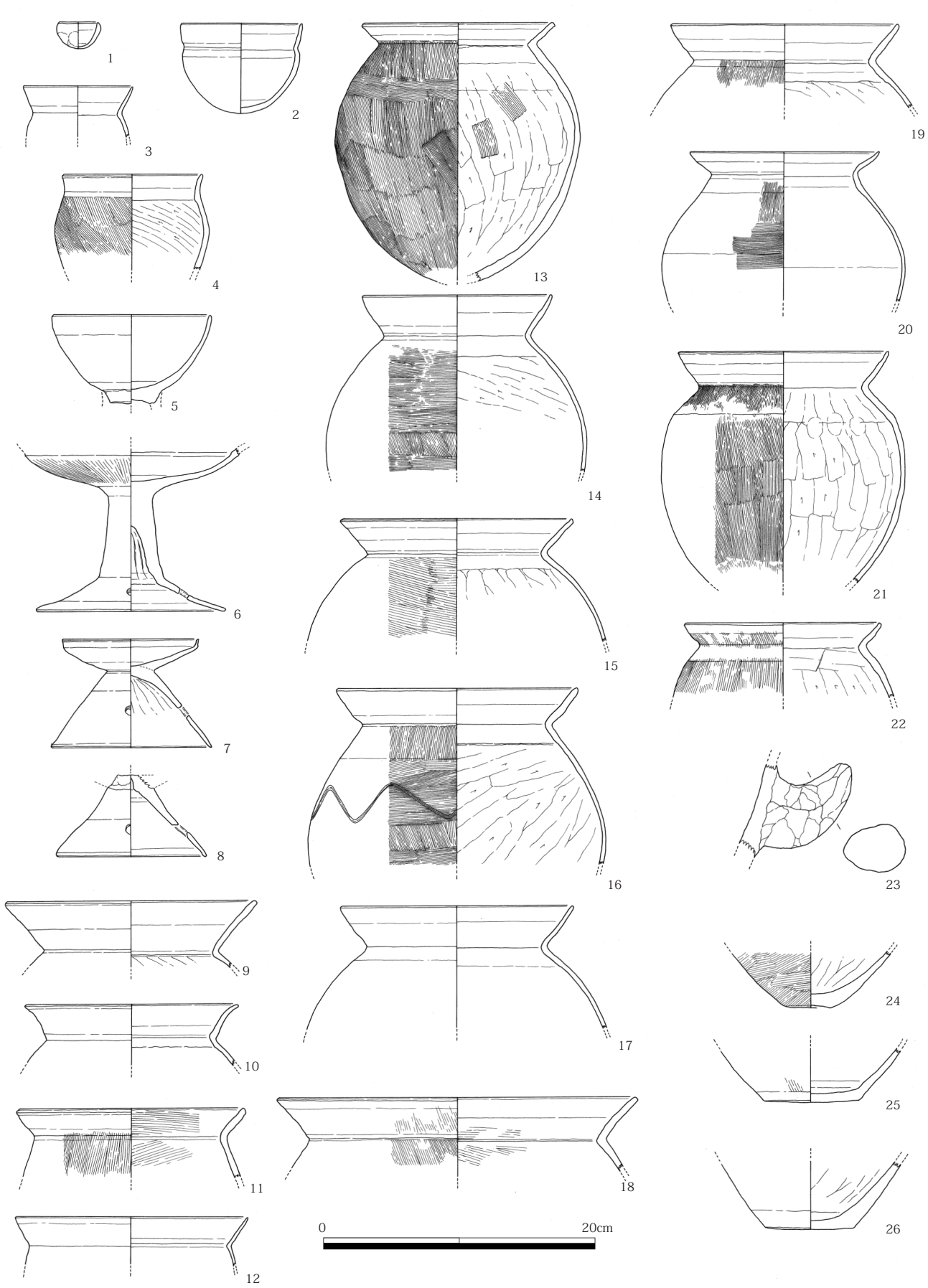


Fig.7 SK-01 出土遺物実測図 1（S=1/4）

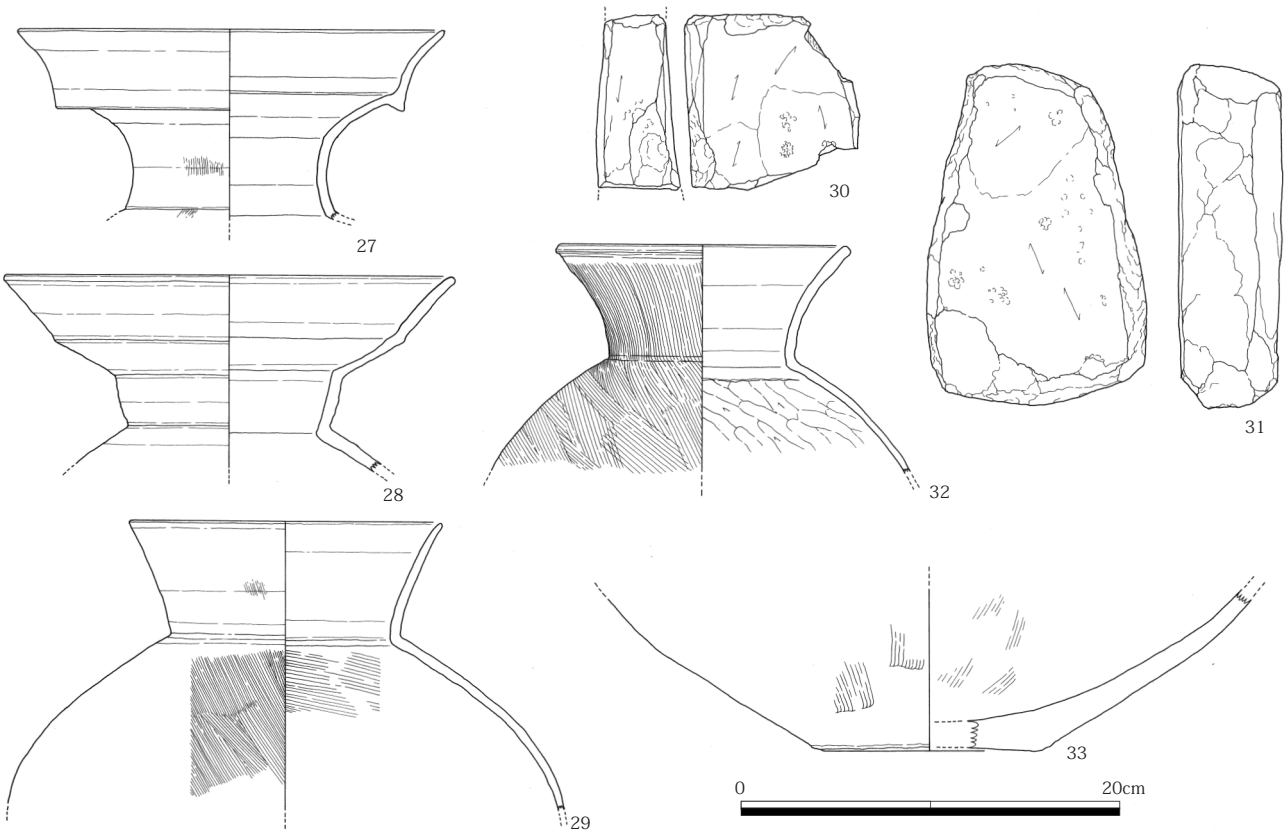


Fig.8 SK-01 出土遺物実測図 2（S=1/4）

30 は側面にも研磨痕が観察できる。33 は壺底部片で、内外器面ともにわずかに刷毛目調整痕が残る。

SK-02（Fig.6）

SK-01 の北側に接して確認された円形土坑で、直径 1 m 前後を測る。遺構検出面から土坑底面まで 30cm 程度の深さを測るが、土坑の大半を試掘トレンチにより掘削されているため正確な法量は判然としない。なお、試掘調査時にもこの土坑付近からコンテナケース 1 箱分の土器が出土している。埋土は SK-01 と同様に粗砂混じりの黒褐色粘質土で、大量の土器片が出土した。出土遺物の分布は土坑の東側に集中しているように見えるが、これはトレンチにより中央分が掘削されているためで、SK-01 と同様に供献方向が西側であることは確認できなかった。検出された土器類は標高 7.0m 付近に集中しているが、この高さ以下でも土器の出土は続いたため、連続して行われた祭祀に伴う供献行為の時期差として捉えることができる。

出土遺物を Fig.9・10 に示した。34 ～ 36 は土師器甕である。36 は長胴の体部に直線的に広く口縁部を持つ。37 は壺の口縁部片であるが、外縁下端部を垂下させる。38 は二重口縁壺の口縁部片であるが、頸部に突帯を設け刺突具による沈線で格子状の装飾を施す。39・40 土師器甕である。39 は厚い器壁を持ち、口縁内面には横位の刷毛目調整を施す。40 は器壁が薄く仕上げられ、縦位の刷毛目調整の後、体部上部と中位に横位の刷毛目調整を加える。41 は二重口縁部壺で、口縁部上半が大きく外反して伸びる形状となる。内外器面ともにナデ調整され、色調は橙色を呈する。37・38・41 は搬入品と考えられる。42 は土師器鉢である。内外器面ともに横位の刷毛目調整が施される。色調は外面が黒褐色、内面は褐色～黒褐色を呈する。43 は須恵器蓋である。44 は須恵器壺の胴部片である。SK-02 の存続時期と SD-01 による埋没時期から、43・44 の須恵器は SD-01 に伴う遺物と考えられる。45 は土師器壺胴部片である。内面には接合痕が明瞭に残り、段差を解消するための指押

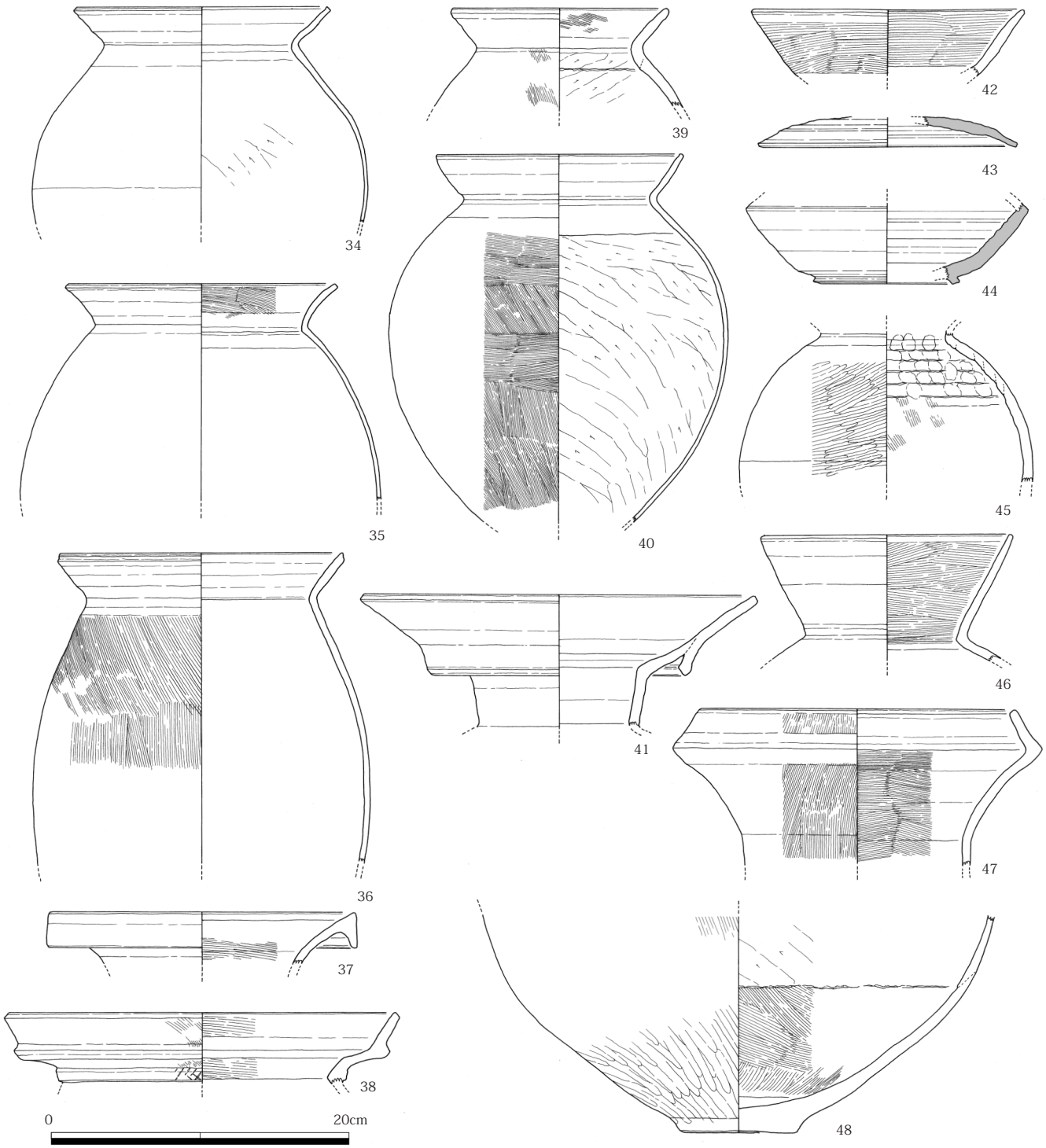


Fig.9 SK-02 出土遺物実測図 1（S=1/4）

さえ痕が多数観察できる。46 は土師器壺、47 は複合口縁壺である。外器面は縦位の刷毛目、内器面は横位の刷毛目調整を施し、色調は褐色を呈する。48 は弥生土器壺の底部片である。外器面はヘラ磨きと刷毛目調整、内器面は底部から接合部位までは刷毛目調整、それ以上では板ナデにより調整されている。49 は土師器小型丸底壺である。外器面はヘラ磨き、内器面は横ナデと板ナデにより調製されている。50 は高坏、51 は器台である。52 は土師器鉢底部片か。高台状の底部をもち、体部はナデ調整される。53 は鼓型器台か。54 は高坏脚部片である。外器面は摩滅するが内器面にはナデ調整痕が残る。55 は高坏坏部片である。56 は高坏脚部片である。外器面には縦位の刷毛目、内器面に

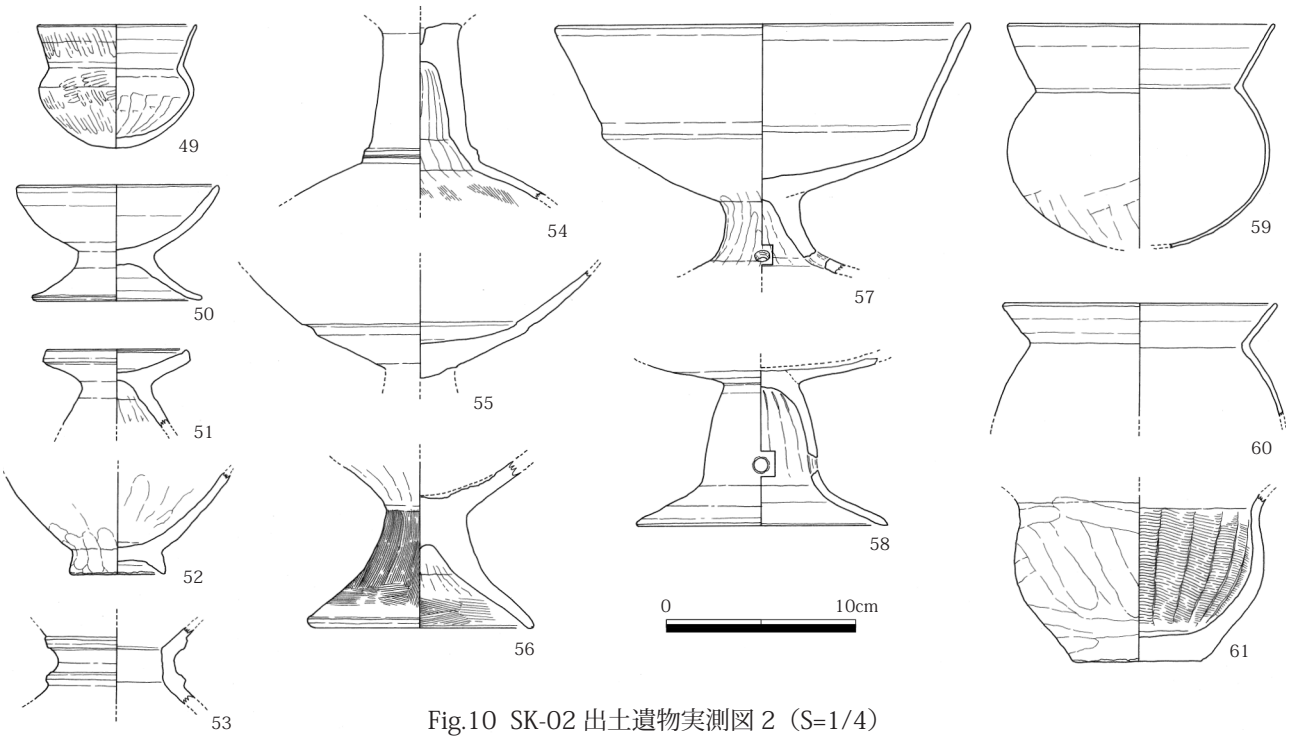


Fig.10 SK-02 出土遺物実測図 2（S=1/4）

は横位の刷毛目調整が残る。57 は土師器高坏である。坏部の身は深く脚部は短い。58 は高坏脚部片である。器壁が薄い脚部で脚部端部が大きく開く。59 は土師器小型丸底壺である。器壁は薄く摩滅により調製痕は観察しづらいが底部付近に板ナデ痕が残る。60 は土師器甕である。61 は土師器鉢である。底部は平底で器壁は厚い。外器面はナデ調整され、内器面は断続する刷毛目調整が施される。色調は灰褐色を呈する。SK-01・02 ともに遺物の出土状況等から祭祀土抗と考えられるが、玉類等の出土は確認されなかった。遺物より SK-02 は SK-01 よりわずかに遅れて営まれた土坑と考えられる。

SD-01（Fig.6）

調査区内の東側半分を占める流路痕跡で、この堆積層を形成した旧河川は低丘陵裾部沿いに南東から北西方向に北流する。流路は上層に暗褐色砂質土、それ以下に粗砂・シルト・粘質土が交互に堆積し、縄文時代の石器から古代の遺物までを包含する。遺物は川岸に近い西側に多く集中する傾向が見られ、その多くがほとんど磨滅を受けていない。流路上にも床土が水平堆積しており、開墾時に同様に削平を受けている。遺構面とした黄褐色粘質土層の下には、粗砂・砂質土・粗砂と堆積する。この層位からの遺物の出土はなかった。下層の粗砂層は透水層となっており、大量の水が現在も湧水する。毎分数リットル以上の湧水が認められ、湧水に合わせて周囲の粗砂層が浸食・崩壊していくため、これ以下の掘り下げは行っていない。近隣の調査では無遺物層のシルト層以下にて縄文時代前期の河川が検出されているが、今回の調査では安全上の問題から行っていない。

出土遺物を Fig.11 ～ 13 に示した。62・65 は土師器壺、63 は手捏土器である。64、66・67、69 ～ 72 は土師器小型丸底壺、68 は土師器坏である。73・74 はタコツボである。73 は穿孔を伴わないが口縁部下に段を有する。74 は胴部側面と底部に穿孔を施す。75・76 は沓形支脚である。77・78 は器台である。79 は高坏坏部片、80 ～ 83、86 は高坏脚部片である。84・85 は台付鉢である。87・88 は須恵器坏蓋、89 は須恵器坏である。90 は須恵器壺口縁部片、91 は須恵器甕の底部片である。87・89 の 2 点は身と蓋が重なったまま、77 の支脚の下部から出土した。92 は壺口縁部片で、外器面は縦位の刷毛目、内器面は横位の刷毛目調整を施す。93 は鉢、94 は土師器甕である。95 は

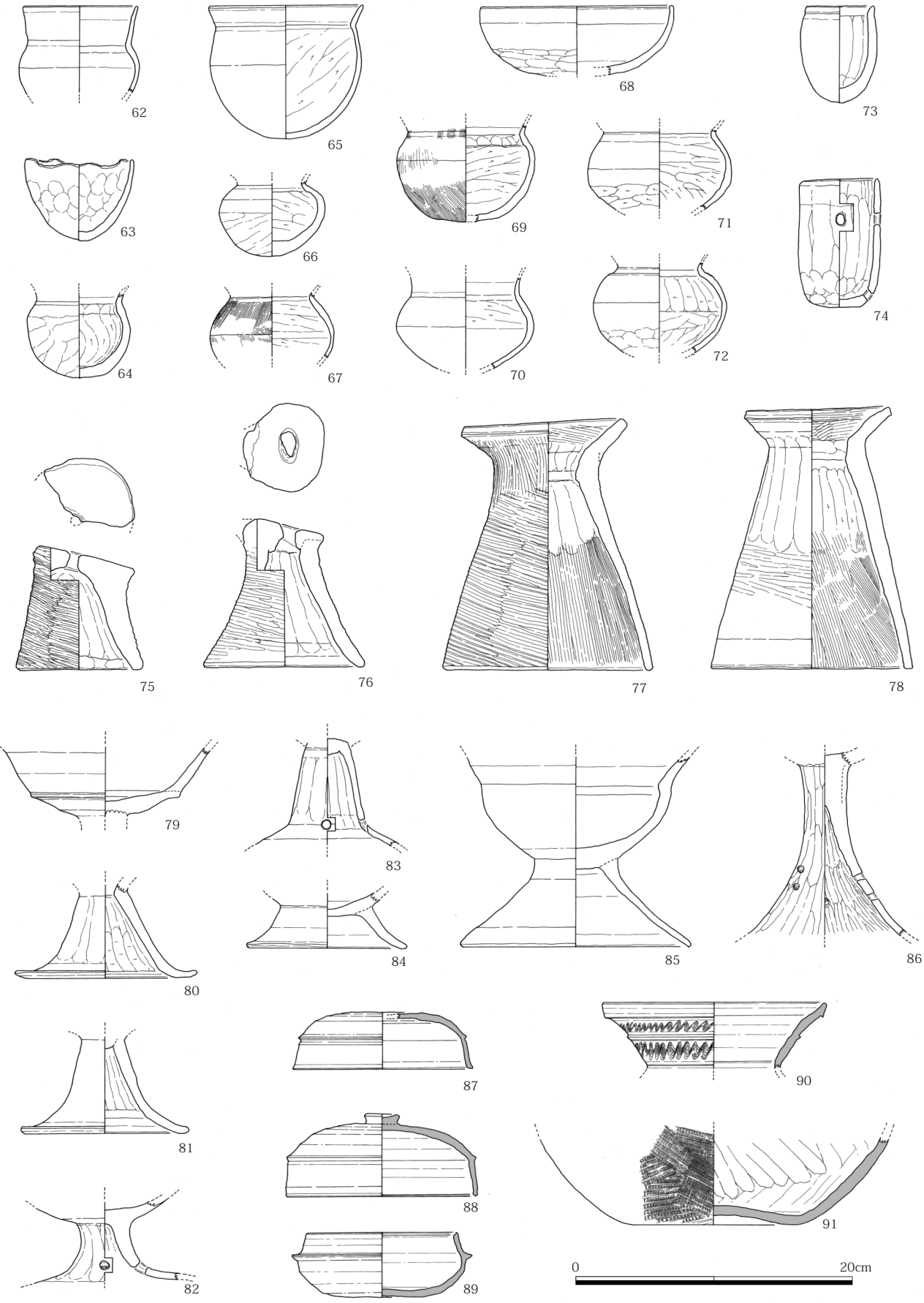


Fig.11 SD-01 出土遺物実測図 1（S=1/4）

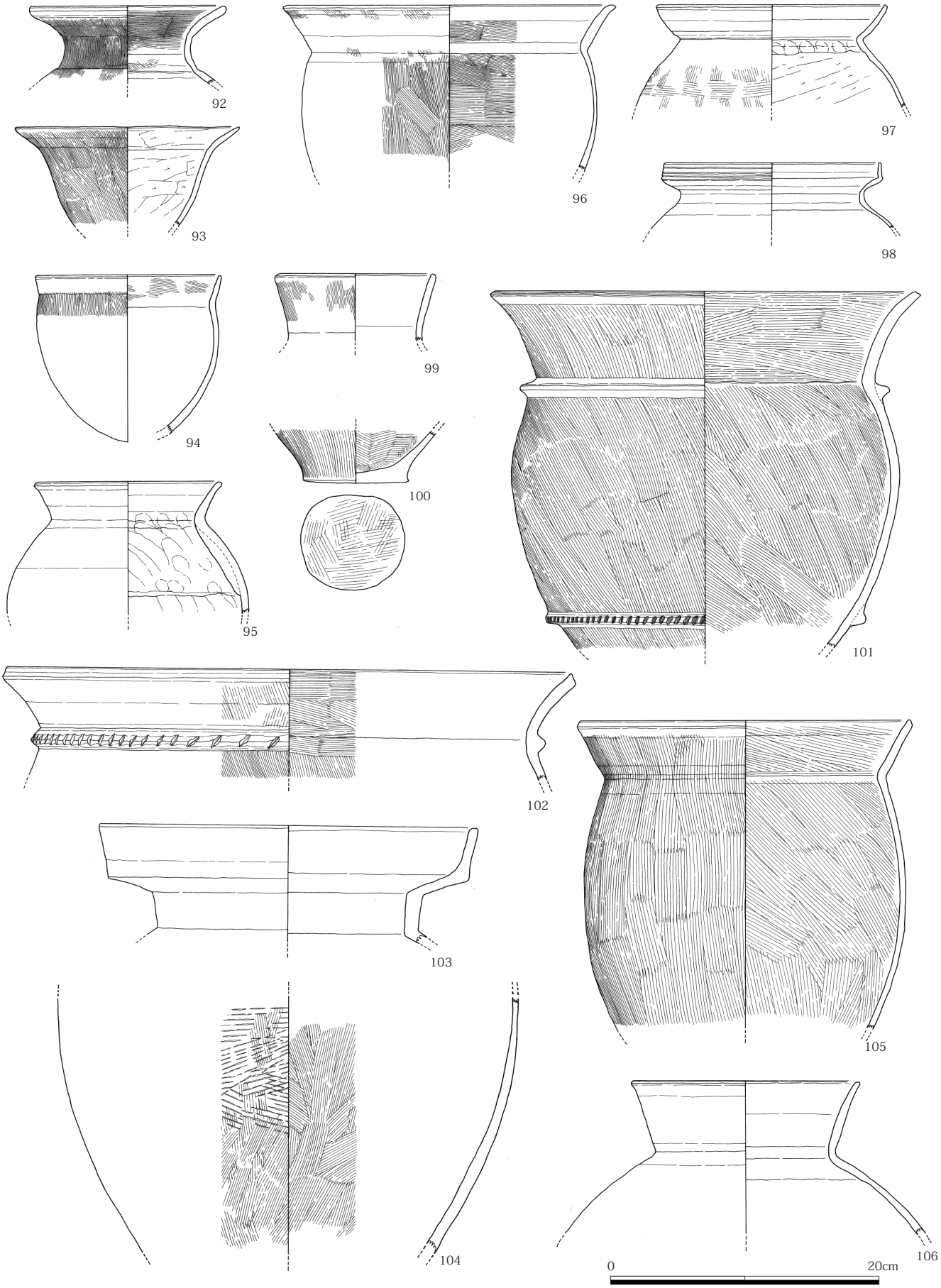


Fig.12 SD-01 出土遺物実測図 2（S=1/4）

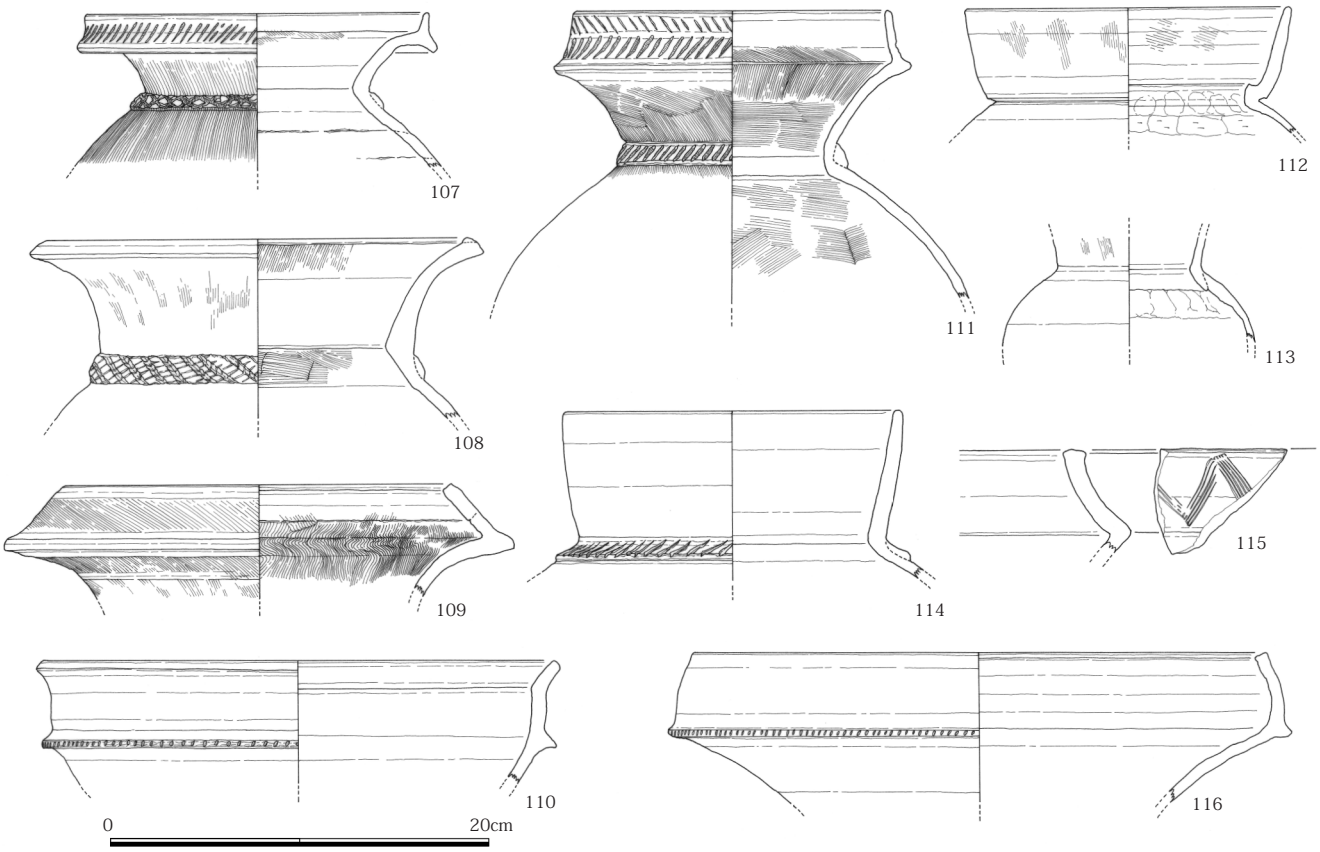


Fig.13 SD-01 出土遺物実測図 3（S=1/4）

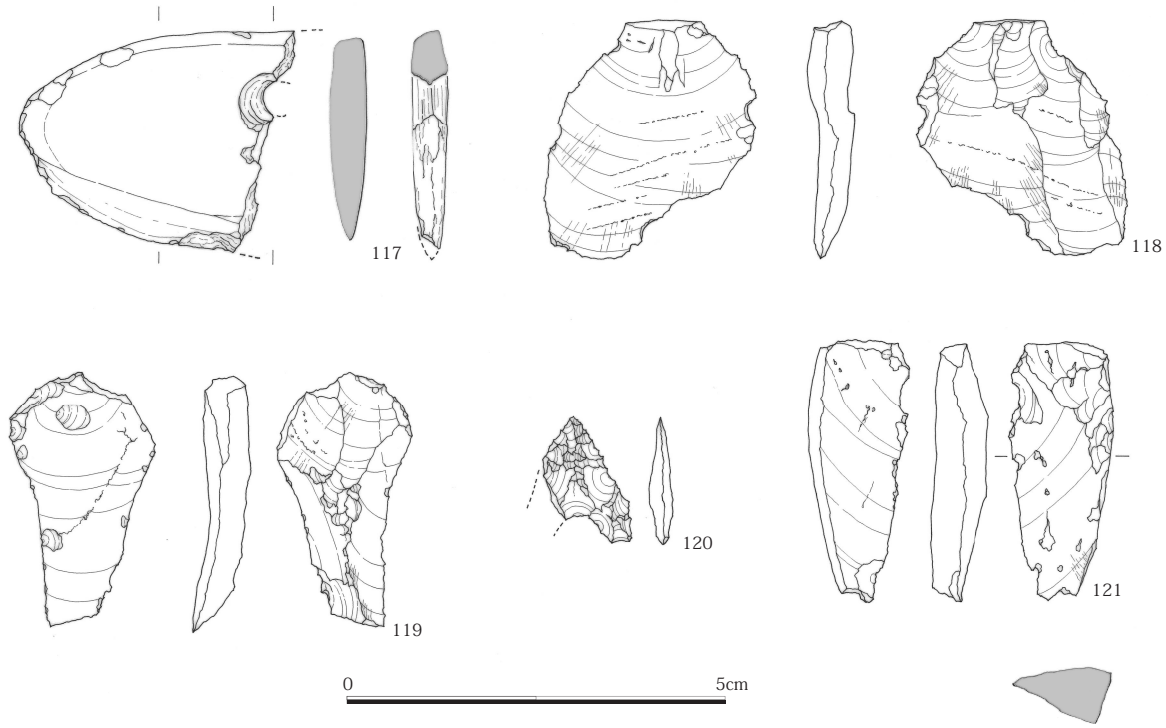


Fig.14 出土遺物・石器実測図（S=1/1）

土師器甕で胴部上半内面に粘土紐を貼り付けナデ付ける。96 は土師器甕、97 は土師器甕である。98 は土師器甕である。口縁部を直立させ平坦面を造り三条の沈線を巡らせる。99 は直口壺口縁部片、100 は弥生土器甕底部片である。不定方向への刷毛目調整を施す。101 は弥生土器甕で、頸部と胴部下半に突帯を巡らせる。胴部下半の突帯は断面三角形でヘラ状工具突端による刻み目を施す。102 は弥生土器甕で、復元口径 42cm を測る。頸部に刻み目突帯を巡らせる。103 は土師器二重口縁壺である。104 は弥生土器甕胴部片である。105 は弥生土器甕で、やや幅の広い刷毛目調整を施す。106 は土師器壺である。107・108 は弥生土器壺口縁部片である。107 は頸部に格子状の刻み目を施す突帯を巡らせ、口縁部には工具突端を押しつけ刻み目を施す。111 は土師器壺口縁部片で頸部突帯と口縁部に刻み目を施す。109 は複合口縁壺、110 は土師器壺口縁部片である。112 は土師器壺口縁部片、113 は土師器壺頸部片である。114 は弥生土器壺口縁部片で、頸部に刻み目突帯を巡らせる。115 は複合口縁壺口縁部片で、刷毛目による鋸歯文状の装飾を加える。116 は弥生土器壺口縁部片である。このほかにも縄文土器片をはじめ多くの弥生土器・土師器・須恵器等が出土した。これらの遺物は調査地点より上流域から流れ着いたものであるが、これまでの調査で該当する時期の集落は確認されていない。

その他の出土遺物・石器（Fig.14）

調査では多くの土器とともに石器･石製品が出土した。これらの多くは SD-01 から出土したもので、第 8 次調査地点で使用されたものではないが、中村町遺跡全体の遺構・遺物の分布状況を考える上では重要な資料となる。117 は SK-01 出土の石庖丁である。紐通しの穿孔部で欠損する。118・119 は黒曜石製のスクレイパー、120 は黒曜石製の石鏃である。121 は黒曜石製の刃器で、全体が風化する。この他にも黒曜石剥片や石核が出土した。

第三章　まとめ

中村町遺跡第 8 次調査では、遺跡範囲東側を流れる旧河川流路と弥生時代終末期から古墳時代前期にかけての祭祀土抗 2 基を検出し、縄文時代から古墳時代にかけての遺物を確認した。集落自体の検出はなかったが、集落近隣の水辺出行われていた祭祀の痕跡を確認できたことは、第 8 次調査地点の西側丘陵上に集落が存在していたことを示すものであり周辺の調査に期待される。今後の調査に求められるものとして、遺跡範囲全体に広がる縄文時代前期中頃から中期初頭までの集落確認、縄文時代晩期の集落、弥生時代後期後半～古墳時代初頭の集落、4・6 次調査で確認されている古代官衙関連遺構等多岐にわたる。最後に第 8 次調査の成果から確認できたことを列挙しておく。

前述のように遺跡範囲東側には旧河川流路が存在している。周辺が大きく開発される以前の地形図と現代の地形を Fig.15 に示した。当時の地図と等高線から河川改修される以前の若久川は調査区付近では丘陵間を蛇行するように北流していたことが分かる。また試掘調査の成果からも第 8 次調査地点内で東側に流路が大きく屈曲していたことも判明している（Fig.4 参照）。このような地形的条件から本調査地点内に位置する流路内堆積層に大量の土器が流れ着いたものと考えられる。なお、旧地形図から本調査地点南側 250m 地点付近の丘陵裾部に奥行 40m 程度の平坦面が存在していたことが確認でき、この付近に集落が存在していた可能性が考えられる。また、現在の埋蔵文化財包蔵地図では中村町遺跡と南側の若久 A 遺跡は別の遺跡として登録されているが、同一丘陵上であり、かつ鞍部などで画されていないことから本来は一体の遺跡であった可能性も指摘しておきたい。

本調査の出土遺物からは多くの搬入土器が確認されている。SK-01・02 に供献された土器にも九

州外から搬入された土器が含まれるが、これらが持ち込まれた背景にも触れておく。これまで行われた数次の調査成果から、中村町遺跡は福岡平野を南北に貫く古代官道（水城西門ルート）に近く、なおかつ福岡平野から樋井川流域をはじめとする西側を結ぶ交易陸路の分岐点に位置することが指摘さ

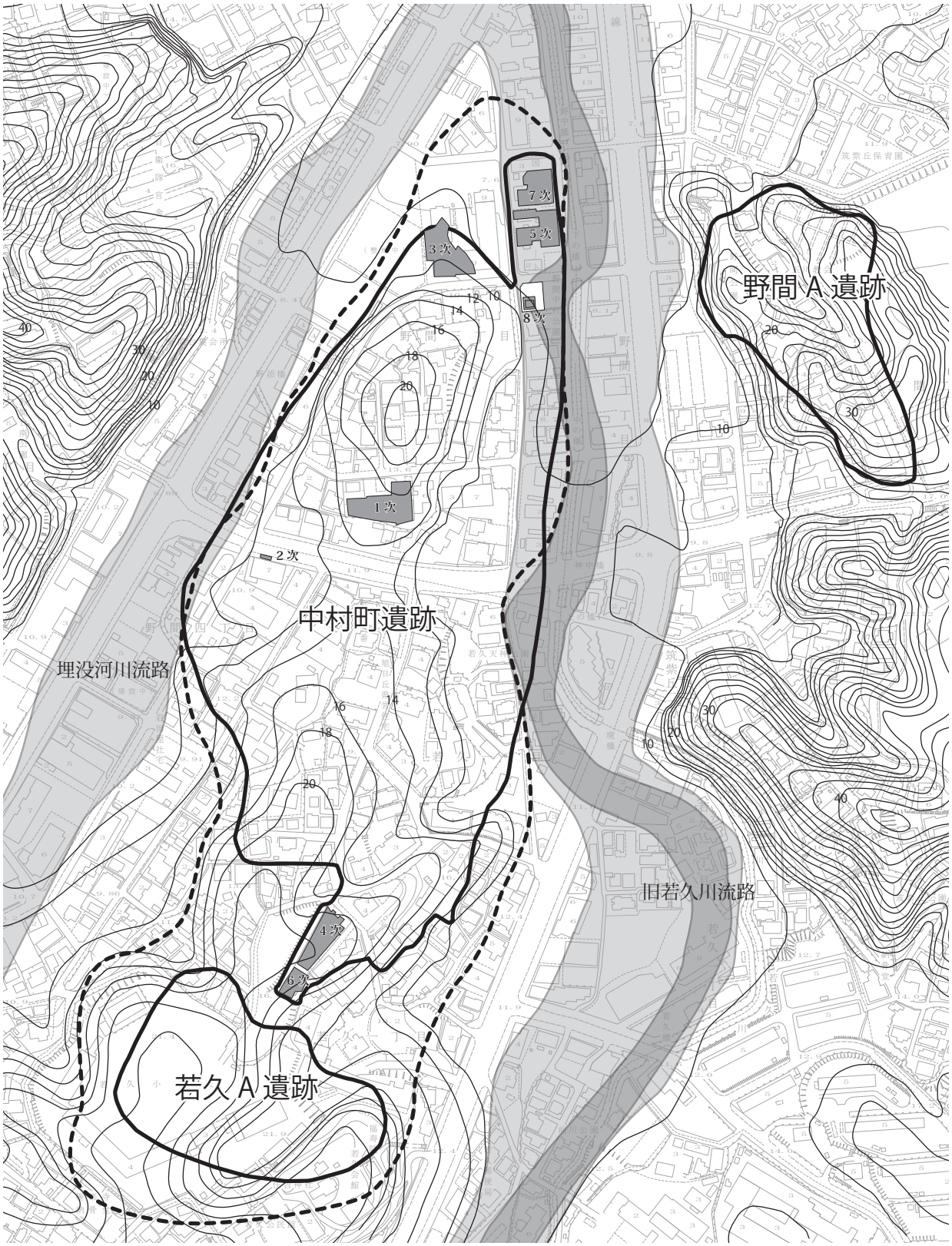


Fig.15　中村町遺跡周辺地形図（S=1/4,000）

れてきた。このような交易陸路の要所として役割は、古代に突如として現れたものではなく弥生時代後期後半まで遡るものと考えられ、要衝の地にあった遺跡の立地環境から多数の搬入土器がもたらされたものと考えられる。また、出土遺物のなかにはタコツボが数点含まれていた。湾岸の集落遺跡であれば漁労具として普通に出土する事例が知られているが、本遺跡は当時の海岸線から 5km 以上離れていた。これらは日常の漁労具ではなく、博多湾沿岸の集落遺跡から収穫物であるイイダコとともに交易品として持ち込まれたものと考えられる。

周辺地域の地名（塩原・塩煮塚）や近世以降の伝承などから、中村町遺跡の目前にまで海岸線が到来していた可能性が考えられているが、もっとも海岸線が進入してきた縄文時代前期末の海進期においても、海岸線は現在の標高 2.2m 付近までしか到達していない。河川堆積作用により調査区周辺の現在の標高は 8m 前後となるが、第 5 次調査で確認された縄文時代前期後半の河川底面の標高も 4m 前後である。また、近年の調査により那珂川周辺の埋没地形からも弥生時代～古墳時代の遺跡が確認されており海岸線が南区野間周辺まで到来していたことはなかったと判断される。

中村町遺跡は古くから知られている遺跡ではあるが、大規模な土地改変等の開発が昭和の早い段階から行われているため遺跡の実態が不明確な範囲が大きい。今後の調査により縄文時代から古代までの集落遺構の所在が明らかとなることに期待したい。

報告書抄録

ふりがな	なかむらまちいせき
書名	中村町遺跡7
副書名	中村町遺跡第8次調査報告
巻次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1366集
編集者名	本田浩二郎
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	福岡市中央区天神1丁目8-1
発行年月日	平成31（2019）年 3月25日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間		調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号			調査開始	調査終了		
なかむらまちいせき 中村町遺跡（1721 8次）	みなみくのま 南区野間3丁目162番1、162番2	40134	0167	33°33'37.3"	130°24'53.6"	2017.9.25	2017.10.11	77.22	老人福祉施設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中村町遺跡（1721 8次）	集落跡	縄文～古代	土坑・流路	弥生土器・土師器・須恵器等	

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1366 集
中村町遺跡 7
—中村町遺跡第 8 次調査報告—

発　行　日　平成 31 年 3 月 25 日
編集・発行　福岡市教育委員会
〒 810 － 8620　福岡市中央区天神 1 丁目 8 － 1

印　　刷　株式会社ミドリ印刷
〒 812-0857　福岡市博多区西月隈 1-2-11

現代の海岸線
中世期の海岸線
縄文海進期の海岸線
中村町遺跡
0
10km